

【原著論文】

ロールレタリング研究の適用対象・方法論・効果検証
に関する分析と課題

Application, Methodology, and Effects of the Role Lettering ;
Review and Discussion.

金子 周平¹⁾・高木 春仁²⁾・松岡 洋一³⁾
1) 鳥取大学, 2) 佐賀少年鑑別所, 3) 岡山大学

I 問題と目的

ロールレタリング (Role Lettering ; RL) は、矯正教育の領域から始まり、その理論的説明は交流分析やゲシュタルト療法、春口の臨床仮説¹⁾が担ってきた。しかし今日の RL 実践は多くの領域・対象に渡っており、研究の知見は一般化されやすい知見と、特定の条件下でのみ得られる知見とが混在した状態にある。そのため、研究を蓄積する際に参照する先行研究を整理する必要がある。本研究は RL 研究のレビューから、領域や対象別の議論が行われるための概念整理、効果的な方法論や効果検証の分析、研究上の課題の提示を目的としている。

II 方法

1. 対象 学会発表・論文 377 件をレビューの対象とした。CiNii (NII 論文情報ナビゲータ) と医学中央雑誌、矯正図書館の文献検索において「ロール (・) レタリング」、「役割交換書簡」のキーワードで検索したもの他、RL 研究会 (研究大会)、RL 学会研究発表論文集 (抄録集)、RL 研究の資料を加えている。

2. 手続き 全論文について、タイトル、著者、雑誌名、発表年などの基本情報に加え、領域や対象、研究の種類、使用尺度、効果を書き出した。そのデータに基づき、研究数の推移の分析、研究の概観、概念整理と分析を行った。

3. RL の実施形態の分類 春口は RL の個別・集団実施の違いを A, B 方式とし、C 方式を自己カウンセリング、D 方式を解離性同一性障害へのアプローチとした²⁾。しかしこの分類は、RL の構造・機能・対象の視点が交錯し、相互相反しにくい。そこで本研究では、RL の構造と機能の二軸による新

しい RL の分類方法を提案する。RL 研究では、まだ疾患や状態像、年齢によって分類できる研究の蓄積がないためである。構造は「個人 Individual ; I」と「集団 Group ; G」、機能は「心理療法的 Therapeutic ; T」と「教育的 (成長促進的) Educational ; E」に分けた (Table 1)。RL の構造の違いは人数だけでなく、個別の RL の進め方やフォローのしやすさにも影響する。RL の機能は、目黒の「教育的技法と心理的技法」の視点³⁾や、松岡の機能分類⁴⁾を参考にした。この分類で手紙の相手や形式を考慮しなかったのは、同じ「私と消しゴムの対話」の RL でも、学級での道徳教育を狙いとすれば G-E 法、個人心理療法の中で主訴に応じて「消耗してきた気持ちの表現」を促せば、I-T 法となるためである。

Table 1. RL の新たな分類方法による 4 つの方法

RL の構造・機能	心理療法的 Therapeutic	教育的 (成長促進的) Educational
個人 Individual	I-T	I-E
集団 Group	G-T	G-E

III RL の実践領域

レビューした論文の実践領域は、以下の 8 つに区分された。領域毎の研究種別は Table 2、各研究数の推移は Table 3、Figure 1 に示す。

1. 矯正教育 この領域では単一事例研究が主流である。指導者との関係性の中で支えられながら、少年が家族や被害者との RL を行い、強い感情を伴う気づきを体験する事例が多い。少年の特徴に応じた問題群別指導⁵⁾も行われている。I-T, I-E 法の報告が多く、少年らの個別の対応が重視されてきたことを表している。

2. 学校教育 この領域では複数事例研究と調査研究が多く、G-E法が殆どである。内容はいじめの予防^{6,7)}、生と死の教育⁸⁾、死への準備教育⁹⁾などがあり、例えば10年後の自分とのRLや物語の登場人物間のRLが行われている。

3. 医療(心理療法) 摂食障害の事例では、受容的な母親像の内化¹⁰⁾やRLと行動療法との併用による認知の変容¹¹⁾が扱われ、アルコール依存^{12,13)}や薬物依存^{14,15)}の事例でも、母子関係や自身の問題に直面させる課題RLが行われている。これらは矯正教育における手法の応用であり、医療領域に特徴的な知見や効果は論じられていない。近年ではG-T法の試みとして、精神障害者の就労支援のSST(Social Skills Training)においてRLを用いた事例¹⁶⁾もみられる。

4. 対人援助職教育 対人援助職者や学生への教育にRLが活用された報告は2000年から始まる^{17,18)}。RLは被援助者への否定的な感情¹⁹⁾や逆転移²⁰⁾に気づく方法として、また被援助者を共感的に理解する方法^{21,22)}として用いられている。I-E法として、心理の専門職²³⁾や精神保健福祉士の教育分析やスーパービジョン^{24,25)}、教師の自己効力感を高める

Table 2. RLの各実践領域における種類別の研究数

	単一事例研究	複数事例研究	調査研究	その他	計
矯正教育	49	21	5	21	96
学校教育	12	44	50	23	129
医療(心理療法)	10	5	0	0	15
対人援助職教育	5	9	30	2	46
学生相談	11	0	0	0	11
家族支援	8	0	4	0	12
教育領域等の援助	21	6	1	5	33
その他	0	1	3	31	35
計	116	86	93	82	377

Table 3. RLの各実践領域における研究数の推移

	年	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11
矯正教育		1	2	0	3	3	0	1	2	4	7	6	3	2	6	7	7	5	4	3	4	5	2	1	2	7	2	3	4
学校教育		0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	2	5	7	4	8	8	7	8	11	9	8	6	10	8	7	4	10	3
医療		0	0	0	1	1	0	1	1	0	0	0	0	1	0	1	0	2	0	1	0	1	1	0	0	1	1	2	0
対人援助職教育		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3	2	8	4	0	5	6	4	2	5
学生相談		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3	1	4	1	0
家族支援		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	0	2	2	2	0	0	0	2	1
教育領域等の援助		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	1	2	1	1	2	2	2	5	4	3	5	1	1
その他		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	3	3	3	4	5	2	3	0	2	3	4
計		1	2	0	3	4	1	1	4	6	9	9	8	10	11	17	17	19	22	21	27	25	19	29	23	27	19	23	20

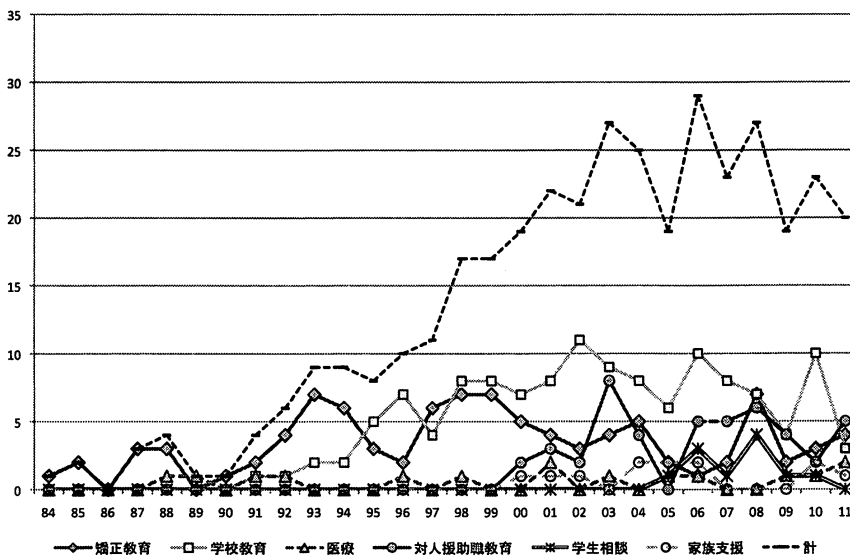


Figure 1. RLの各実践領域における研究数の推移

方法²⁶⁾などがあるが、看護学生を対象としたG-E法の報告が最も多く、人間関係の改善や学習の動機付け²⁷⁾の効果が見込まれている。

5. 学生相談 この領域の事例研究は全て岡本茂樹氏の実践によるが、RL実践の一領域として捉えられる程に事例が蓄積されている。その多くはI-T法として捉えられ、本音の吐き出し^{28,29)}、自己分析³⁰⁾の作業が行われている。

6. 家族支援 虐待の問題を抱える母親への援助^{31,32)}や、赤ちゃんとのRLによる安定した親子関係の支援^{34,35)}、母親の子どもに対する心的葛藤の整理³⁶⁾などが行われている。報告の多くはI-T法であるが、対象者の動機が高い場合には、養育者としての自覚や子ども理解を目的としたI-E法も成立すると思われる。

7. 教育領域等における援助 教育・福祉領域での心理療法(I-T法)で、例えばスクールカウンセラーなどが個別にRLを実施する場合である。様々な対象者と会う領域であるため、RLの実施には慎重である必要がある³⁷⁾と言われている。

8. その他 殆どがRLに関する理論的まとめや文献レビューであるが、RLを使用した自助グループの事例³⁸⁾も含まれており、RL実践の新しい可能性といえる。

IV 適用対象の特性

1. 知的水準 矯正教育領域では、役割交換の形式をとれずIQが有意に低い群(10%)がいること³⁹⁾、学校教育領域でも作文能力などが低い生徒に効果を期待しにくいこと⁴⁰⁾が指摘されており、RLについての理解⁴¹⁾は重要である。しかし、IQの高い者の方が指導者の評定が低い⁴²⁾という指摘や、書きやすい配慮によりIQ=70程度の対象者がRLを記述した事例研究⁴³⁾も示されている。つまり知的水準のみでRLの適否を論じず、言語理解・表現の困難な対象者への配慮や介入方法を論じる方が有用であると思われる。また高機能自閉症青年の支援にRLを用いた事例報告⁴⁴⁾もあり、発達障害の事例への適用も議論する必要があるだろう。

2. 病態水準 RLの実施には、病態水準に配慮する必要がある³⁷⁾と言われている。春口はRLが境

界性人格障害の自己の客観視に有効である⁴⁵⁾と主張したが、後年その治療は容易ではない⁴⁶⁾とも述べた。RLの中で「内界と外界の区別のあいまい化」⁴⁷⁾が進む危険性も考えられる。人格障害の治療では契約的關係があるべき⁴⁸⁾と言われるため、RLの目的や課題を明確にする工夫等が必要であろう。また解離性同一性障害への適用(D方式)²⁾も、具体的な経過や手続きが明らかでなく未完成の方式と思われる。RLの実施は、病態水準によって、トラウマや怒り、自己否定感に目を向けさせる可能性³⁷⁾に配慮し、医師などとの連携やサポート⁴⁹⁾も視野に入れることが必要である。ただしRLも一般的な筆記課題⁵⁰⁾と同様、現実検討が可能な水準のカタルシスや気づき⁵¹⁾に効果的であると考えられる。また統合失調症については、SSTの課題としてのRLの使用¹⁶⁾以外に報告はない。安全性が配慮され、構造化された場面以外では、かなり慎重を期する必要があるだろう。

3. 年齢 最も低年齢では、小学校2年生のRLで開始後11ヶ月頃に視点の獲得がみられた⁵²⁾報告がある。RL適用の前提となりうる「ごっこ現実の区別」や「メタ認知」の質的転換は5歳後半である⁵³⁾と言われるが、文章表現は、9、10歳を境目に質的にも量的にも異なる⁵⁴⁾と指摘されている。さらに小学校高学年では「良い文章への欲や焦り」、中学校では「内面を表すことへの抵抗感や背伸びした表現」⁵⁵⁾などが表れる。そのため、RLの形式どおりに「ただ書ける」として、そこで気づきやカタルシスなどの心的作業が行われることを区別し、適用年齢を論じることが必要であろう。高齢者に対する実践は少なく、RLを用いてライフストーリーの語りを支援した事例⁵⁶⁾、激しい怒りを感じながらも書く力が湧かない高齢者の事例⁵⁷⁾のみである。生涯発達の課題にRLを用いるメリットを見極めることと、本人のペースを尊重した導入が重要と言えるだろう。

V RL実践の方法論

1. 複数の実践に共通する効果的な条件や介入 多くの実践(事例研究)に共通してみられたRLの条件や介入を整理する。これらは条件や介入として絶

対的な意味をもつものではなく、領域や対象、狙い、方法によって相対的なものである。

(1) レポートの形成 RLの実施にはレポートの形成⁴¹⁾、指導者に対する信頼感^{58,59)}、感情を素直に表現できる場作りと援助⁶⁰⁾が重要であると指摘されている。RLはその簡便さから「いつでもどこでもできる」⁶¹⁾側面はあるが、それが安全で効果的であるためにはレポートの形成が必要なであろう。集団実施(G-T, G-E法)の場合の信頼関係形成の方法論についてはさらなる議論が必要である。

(2) 自分から相手に書くRLを書く順番は「自分から相手へ」が先であること⁶²⁾は複数の実践者の主張にみられる。自分から思い切り本音を出させると相手の立場や気持ちになりやすい⁶³⁾ためである。また、相手の立場に立たせると抵抗が生じることから「自分から他者へ」の課題を中心にするのが効果的⁶⁴⁾とも言われている。RLの考案者である和田英隆氏も、技法としてとまり始めた1985～87年頃、「役割交換が必須だとは考えていなかった」⁶⁵⁾と回顧している。

(3) 表現を促進させる 表現を促すために、「今ここで」の感情を表現させること⁶⁶⁾、話し言葉で書くこと⁶⁷⁾などの介入がなされる。また表現が苦手な対象者には、「野良猫から人間」⁴³⁾などの空想の世界の設定⁶⁸⁾がなされる。これらの技法は「投影の応用」とも呼ばれ、抵抗をゆるめる方法⁶⁹⁾の一つである。気持ちを分かってくれる人物を登場させる「補助自我技法」⁷⁰⁾も類似の方法である。また構造面では、便せんや砕⁷¹⁾や吹き出しの使用⁷²⁾による表現促進も提案されている。表現促進を狙った介入は、RLの効果をかなり左右する可能性があると考えられる。

(4) 相手やテーマを丁寧に決める RLの相手やテーマは対象者を尊重し、書きやすいものにし⁷³⁾、自己決断させる⁷⁴⁾ことの重要性が指摘されている。また対象者の内界の自己像⁷⁵⁾、心の動き⁷⁶⁾を捉えた上で、相手やテーマを話し合うことが必要である。書き出しやテーマの指定は「課題RL」と呼ばれ、その中には、「家を出たとき」などの場面設定と「その時の私の気持ちは」という書き出しを指定す

る⁷⁷⁾ものも含まれる。このような対象者にあわせて介入は、G-T, G-E法においては困難であるため、方法論を提案、議論する事例研究が必要である。

(5) 防衛を活用する 防衛を戦略的に活用する方法には、逆説的に反動形成的な気持ちを表現させ、反対の別の感情がわき起こることを促す「両極性技法」⁷⁰⁾、防衛的な気持ちを受容的な人物とのRLで記述させる方法⁷⁸⁾などが考えられている。この方法もG-T, G-E法では実施困難であることが殆どであろう。

(6) 読み取り応答する RLの指導者やセラピストがRLの内容を読むこと⁶⁵⁾の有用性も指摘されている。ただし読むことを予め伝え⁷⁹⁾、対象者が望めばRLを読む⁸⁰⁾という姿勢が必須である。また素直な表現を理解し共感すること⁶⁰⁾、受容しねざらうこと³⁰⁾、応答する力²³⁾が求められる。つまりRLを書いて終わりにせず、その後の気持ちの表現が重要である⁷⁹⁾とも言えよう。I-T, I-E法においてはRLの指導者やセラピストが応答する役割を担い、G-T, G-E法の場合には小グループ等でのシェアリングで相互に応答し合う方法も考えられる。

(7) 他の技法との組み合わせ RLはしばしば、受容的な面接などの複数の処遇と共に実施され⁸¹⁾、ラケットシステム分析や再決断療法⁸²⁾などの一技法として行われることもある。RLに消極的な事例に個人面接を導入する場合^{83,84)}もあるが、RLによって個人面接の深まりをもたらす場合⁷²⁾もあるため、RLと個人面接は相補的な関係と位置づけられよう。また、エンプティチエアを併用して内的葛藤を再現すること^{85,86)}や、RL前にエンプティチエアを実施する例⁸⁷⁾もある。他にも、対象者がRLに抵抗を示す場合や、RLとの相乗効果を狙う場合に自律訓練法も併用されている^{86,88)}。RL後のグループ支援⁸⁹⁾、情動変化などの自己認識帳⁷¹⁾、自分を見つめるワーク⁸¹⁾、自由な思い等を書ける「自分ノート」⁹⁰⁾などは、指導者等と体験を共有して振り返り、体験を定着させる方法と言えよう。

2. 複数の実践に共通する留意点

(1) 表層的な理解 RLの表層に目を奪われず⁹¹⁾、自分自身の言葉で表現されているかの読み取り⁹²⁾

が重要だと言われている。対象者がRLの指導者やセラピストを喜ばせるように書く⁹³⁾という指摘とも関係する点であろう。RLによって反省させるアプローチではAC (Adapted Child「順応した子ども」)を強化する⁹⁴⁾と指摘されるように、表層だけの反省を求めることは、非治療的であるとも言えよう。

(2) 不用意な表現促進 直接的に怒りをぶつけるなどの表現促進は、神経症水準の対象者にも慎重である必要がある⁹⁵⁾。不用意に表現をさせる危険性や精神的負担のため、往復数や記述量の制限⁹⁶⁾も必要であろうし、書く力が湧いてこない事例⁹⁷⁾には、その防衛を守ることが必要な対応と思われる。

(3) 不適切な課題設定 中村らは、課題RLを設定することで、言動の一致しない少年に受容的に接することができる⁹⁷⁾と述べている。これはRLの

指導者やセラピストの陰性感情の解消に寄与する一方、対象者との間で起こる両面的な感情を、指導者らが抱えない介入方法にもなりうる。その課題設定が、対象者の求める変化や治療方針に基づくかを、指導者らは常に考える必要があるだろう。

(4) 現実とファンタジーの混同 RLの記述は自分のイメージに基づくため、現実とファンタジーの相違⁹²⁾が当然起こりうる。衝動性や現実検討に困難さをもつ事例では、RLを現実の相手に見せる(送る)ことと心理的な作業とを混同しない⁹⁸⁾ための説明や、現実でも関わる相手とのRLを控える工夫³²⁾をすべきであろう。

(5) 遺書の作成 遺書の作成が有効であった事例は、近年では報告されていない。慎重な配慮⁶⁵⁾や丁寧なアセスメントなしには、安全性を保てない方法と言えよう。

Table 4. 自尊感情に関するRLの効果

	有意な変化が確認されたもの	変化が確認されたもの(事例研究を含む)
自尊感情の上昇	井頭・松岡, 2005, 2006*** 岡本泰弘, 2006a, 2006b*** 中嶋・山本, 2007* 高杉, 2011**	下村, 2001 三星, 2006a, 2006b 井頭, 2008, 2009

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

Table 5. エゴグラムに関するRLの効果

	有意な変化が確認されたもの	変化が確認されたもの(事例研究を含む)
CP	上昇 細井・犬塚, 2002*; 田中・松岡, 2004*	塚田, 2002; 岡本茂樹, 2006c
	下降 森上・松岡・坂手, 2002*	上田・小栗, 1995; 春口, 1996; 長岡, 1996; 原野, 1997, 2005; 岡本茂樹, 2005a, 2006b, 2008
NP	上昇 飯田, 2000**; 森上・松岡・坂手, 2001*, 2002*; 橋本, 2003*; 田中・松岡, 2004*; 岡本泰弘, 2006b*	塚田, 1991, 1999, 2009a, 2009b; 春口, 1996; 原野, 1997; 高山, 1997; 伊藤, 2002; 飯田, 2003
	下降 飯田, 2000**; 橋本, 2003*	塚田, 1991, 1999, 2008; 和田, 1995; 上田・小栗, 1995; 原野, 1996, 1997, 1999; 春口, 1996; 内田, 1999; 尾口, 2000; 才田・春口, 2000a, 2000b; 岡本・松藤, 2001; 伊藤, 2002; 飯田, 2003; 岡本茂樹, 2008, 2009
A	上昇 飯田, 2000**; 細井・犬塚, 2002*; 橋本, 2003*	原野, 2005
	下降	長岡, 1995; 春口, 1996; 高山, 1997; 尾口, 2000; 岡本・松藤, 2001; 飯田, 2003; 塚田, 2009a, 2009b
FG	上昇	上田・小栗, 1995; 和田, 1995, 岡本茂樹, 2006c
	下降	岡本茂樹, 2006c
AC	上昇	長岡, 1995; 和田, 1995; 春口, 1996; 岡本・松藤, 2001; 岡本茂樹, 2005a, 2005b, 2006b, 2008, 2009; 塚田, 2009a, 2009b
	下降	PC(自我状態の適切な切り替え)の上昇、SR(自分についての思い込み)の低下(原野, 2002)
その他		

* p<.05, ** p<.01

VI 効果検証

1. 統計的に検証されている効果

(1) RL 研究の知見：自尊感情 自尊感情を指標とした研究では、統計的に有意な変化も含め、全てその上昇を示唆している (Table 4)。しかし RL の中で人間関係の行き詰まりや現実、自己との直面をした場合は、自尊感情が低下する可能性も考えられる。研究数も決して多くはなく、さらなる研究が必要である。

(2) RL 研究の知見：エゴグラム 統計的に有意なエゴグラムの変化として、CP (Critical Parent 「批判的な親」) の上昇と下降、NP (Nurturing Parent 「養育的な親」) の上昇、A (Adult 「成人」) の上昇、FC (Free Child 「自由な子ども」) の上昇が示唆されている (Table 5)。事例研究も含めると、NP の上昇、A の上昇は多くの研究に共通している。しばしば望ましくないとされる CP や AC の上昇、A や FC の下降の報告も、自己主張が苦手な児童にとっての CP の上昇⁹⁹、学生の自己理解の結果としての CP や AC の上昇、FC の下降³⁰ などである。つまり個々の事例では一般的でない変化が、十分に治療的であり得ることを示している。これらの結果は、研究の条件や事例の個別性に合わせた理解をすべきであろう。

2. 仮説的效果 統計的に未検証の研究、事例研究、もしくはごくわずかの実証研究によって主張された仮説的效果を挙げていく。ただし春口の臨床仮説¹⁾ やその一部を引用して考察した論文は多数挙げられるためここでは省略した。

(1) 抑圧された感情の解放 抑圧された気持の発散⁵⁹、エゴグラムの C (Child) の解放²⁰、本音の吐き出し¹⁰⁰ などの効果が指摘されている。RL の中で“ないことにされた私 (neglected self)” が自己表現を始める¹⁰¹ とも言われる。感情の解放は、RL のもつ uncovering 機能と covering 機能の統合²⁰ によってなされると言えよう。これらの効果は FC の上昇としても説明されてきたが、より仮説に沿った直接的な効果検証が望まれる。効果検証は、神経症水準への I-T 法を中心に、言語面接のみの群との比較も必要であろう。また、感情を解放すること自体が対象者に役立ち、かつ大きな混乱をもたら

していないことを示すことも重要である。

(2) 自己効力感の向上 主体的に行動する意欲の向上¹⁰²、自立的な生活¹⁰³、自己治癒力¹⁰⁴、自己決断¹⁰⁵、更生への自信の獲得⁹⁰ などの効果が指摘されている。近年は、大学生の進路選択における決断を表す記述の増加¹⁰⁶、キャリア教育における職業選択の意識変容¹⁰⁷ も示されている。RL のいずれの方法でも効果検証が可能であるため、領域や対象を限定した知見の蓄積が望まれる。

(3) 洞察や気づき この仮説的效果はさらに3種類 (a~c) に分類される。a) 「将来展望の気づき」には、時間的展望¹⁰⁴、将来を見つめ直す機会¹⁰⁸、将来への展望の変化¹⁰⁹ などが含まれる。学校教育領域における進路指導¹¹⁰ にも RL が活用されるのはこの効果を狙ったものであろう。b) 「親子関係や家族に関する洞察」^{12,111} も複数の知見がある。この中には自分が大切にされていること¹¹² などの関係性における気づきも含まれる。c) 「自分の感情への気づき」には、素直な気持ち¹¹³、矛盾やジレンマ¹¹⁴、アンビバレントな感情^{87,115} の体験や言語化、気づきが含まれる。「洞察や気づきがえられる」という効果に具体性をもたせるためには、より細かな分類を行った上での効果検証の計画が必要であると思われる。

(4) 罪障感の深まり 矯正教育における I-E、I-T 法の効果として、真の反省¹¹⁶ や罪障感の深まり¹¹⁷ が指摘されており、これには被害者の無念さ⁸¹ や遺族の憤り⁹⁶ に気づくことなどの他者理解の側面も含まれている。学校教育では、自分の非を認める¹¹⁸、いじめは許されないと気づく¹¹⁹ などの取り組みがみられる。

(5) 客観視と整理 RL では、時には距離をとって自分をみつめた文を書き、感情ぐるみの自己洞察が進む¹²⁰ と言われている。事例研究では、自分の意見の整理¹²¹、就職前の自己分析¹²²、漠然とした不適応感の焦点化⁸⁰、看護実践の経験の振り返り¹²³、自分の問題性を批判する思考¹²⁴ などが効果として挙げられている。これらは広い現象を示すため、上記 (3) との異同等の概念整理が必要であろう。

(6) イメージと認知の変化 イメージの肯定的変化¹⁴⁾や認知の変容¹¹⁾、ストーリーの再構成¹²⁵⁾、価値観の変容¹²⁶⁾が効果として指摘されている。相手との関わりを具体的にイメージできる¹²⁷⁾ことがこの効果を左右すると思われる。しかし長時間イメージしても言語化できない部分が多い¹²⁸⁾ことも考慮すべきであろう。

(7) 行き詰まりの解除 これは心理療法のプロセスを進めることで起こる効果と言えよう。交流分析では禁止令の解除¹²⁹⁾、インパスの解除¹³⁰⁾、平衡状態の破壊¹³¹⁾、世代間連鎖の解除、汚染の解除¹³²⁾などの用語で指摘されている。I-T法の一つの効果指標になりうるが、検証に必要なデータ収集の困難さが課題となろう。

(8) 共感性の高まり 春口の「自己と他者双方からの視点の取得」¹⁾やNPの変化として理解されてきた側面である。共感性に関する尺度は多く、目的に応じた効果検証が行いやすい研究領域であるが、実証的研究はまだ非常に少ない。

(9) 国語教育における力 学校教育の中では、国語教育における文章表現力・想像力・思考力¹³³⁾、物語文の読み取り¹³⁴⁾にRLが有効と考えられている。作文指導の中心にRLを位置づける試み¹³⁵⁾もなされている。

Ⅶ その他の研究

1. プロセスの変化 小林による3段階の過程(吐き出しによる言語化、自分のありのままの受容、ポジティブな対応の評価)¹³⁶⁾は、春口の3段階の受容と対決の心理過程¹²⁸⁾と共に、RLの一般的なプロセスと言えよう。また回数や頻度に関しては、10回以上の確保や12.5日に1回の頻度で評定が高いことが指摘されている⁴²⁾。この評定は、RLの内容や取り組みの姿勢、生活態度などの5段階評定^{42,103)}による。しかし個人差も大きいことも指摘されている。一回限りのRL(吐き出し)が効果的である^{137,138)}ことから、導入や課題の設定によってRLの回数の意味は異なると考えられる。また3通目で肯定・中立的な手紙は否定的に、否定的な手紙は肯定的に変化すること¹³⁹⁾、3通目に抵抗を感じ自己変容に結びつくこと¹⁴⁰⁾が示されている。行

き詰まりまで対話を続けると統合が始まる¹³¹⁾という指摘より、一往復のRL後の行き詰まりが何らかの変化と関係しているかもしれない。しかし回数や頻度に関しては一般化できず、包括的な研究を待つ必要がある。

2. 理解の手段(アセスメント) RLを理解の手段とする研究も複数みられる。対象者の禁止令^{85,88)}の理解、交流パターン分析による生徒理解⁹⁾などがそれに当たる。学校教育では、生徒の心情や、自己像・仲間像・教師像の理解¹⁴¹⁾、いじめの早期発見¹⁴²⁾、抱えるストレスの理解¹⁴³⁾がなされている。このような理解を元に、介入や援助を行うことが望ましいであろう。しかしRLをアセスメントのみに用いるには、倫理的な問題が起こりうる。American Psychological Associationの倫理原則¹⁴⁴⁾を参考にしてRLに当てはめるならば、a) RLからアセスメント内容を導く妥当性・信頼性の確認、b) RLを分析することのインフォームド・コンセント、c) RLの提出の任意性、d) RLに習熟した者による実施、e) アセスメント結果の本人への伝達の5点が挙げられる。これらはRLをアセスメントとして使用する際には、充分に検討される必要があるだろう。またRLはそれ自体が大きな負担を与えうるため、当人の援助に繋がることを前提としておくべきである。

Ⅷ まとめと今後の課題

RL研究においても、臨床的に重要な知見の過小評価、また限られた条件での効果の過度な一般化が起こりうる。本研究では統計的に検討されたRLの効果と仮説的な効果を区別しながらも、両者に大きな差をつけずに研究を分析し、RLの実践のまとめと研究の課題を導いてきた。RL研究のレビューから明らかになった実践の方法論、効果はごく限られたものとなった。さらに実践上の課題を導き、効果を検証するためには、本研究を踏まえ、領域や対象、方法別に位置づけながら研究を蓄積していくことが必要である。従来のRLの実証的研究では、使用する尺度の妥当性・信頼性の確認、心理療法の順番待ち(waiting-list)などを用いたRCT(Randomized controlled trial; 無作為化比較実験)が用い

られてこなかったため、今後の実証研究では特に必要であろう。またRLの記述データは特別な教示の元で書かれたものであるため、RL独自の質的研究法の応用・開発も必要である。事例研究においても、一般的な知見の例外や新たな方法の開発として位置づけられる研究、長期的フォローアップがなされた研究などが求められる。

引用文献

- 1) 春口徳雄 (1987) ロール・レタリング入門 役割交換書簡法 創元社
- 2) 春口徳雄 (2000) ロールレタリングの将来への展望 RL学会研究発表抄録集, 1, 6-13.
- 3) 目黒信子 (2007) 教育に活かすロールレタリング 春口徳雄・小林 剛・目黒信子・松岡洋一 座談会/ロールレタリングを語る 現代のエスプリ, 482, 5-29.
- 4) 松岡洋一 (2006) 子どもの心を育むロールレタリング RL研究, 6, 1-12.
- 5) 竹下三隆 (1992) 問題詳別指導におけるロール・レタリングの活用と効果について RL研究会, 1, 1-2.
- 6) 長岡安子 (1995) 中学校におけるロール・レタリングによる学級集団作り RL研究会, 4, 19-23.
- 7) 春口徳雄 (1995) ロール・レタリングによるいじめに対する具体的方策 RL研究会, 4, 33-36.
- 8) 才田幸夫 (1999) 生命を大切に、力強く生きる心を育てる生徒指導 RL研究会, 8, 102-108.
- 9) 岡本茂樹 (2001) ロールレタリングを導入した学級運営の研究―「死への準備教育」の実践に向けて― RL研究, 1, 27-38.
- 10) 原 節子・中村延江・桂 戴作 (1995) ロールレタリングが神経性食思不振症の治療に果たす役割 杉田峰康 (監修)・春口徳雄 (編著) ロールレタリングの理論と実際 チーム医療, 222-232.
- 11) 山中隆夫・竹内敬子・志村正子・武井美智子・吉牟田直 (2001) 治療抵抗性を示す食行動異常症への行動療法併用ロール・レタリング法の導入効果 心身医学, 41 (1), 67.
- 12) 春口徳雄 (1992) ロール・レタリングによる受容と対決 RL研究会, 1, 1-12.
- 13) 春口徳雄 (2001) アルコール依存症者の再決断へのアプローチ―ロールレタリングによる― RL学会研究発表抄録集, 2, 6-14.
- 14) 春口徳雄 (1991) ロール・レタリング (役割交換書簡法) が覚せい剤患者の治療に果たす役割 刑政, 102 (3), 22-34.
- 15) 信川久子 (2000) 課題ロールレタリングを用いた薬物依存少年に対する支援事例 RL学会研究発表抄録集, 1, 49-60.
- 16) 高田美子・中野美智子・木下隆志 (2010) 精神障害者の就労支援に関するロールレタリングの効果について RL学会研究発表抄録集, 11, 35-39.
- 17) 尾口昌康 (2000) 援助職のためのロールレタリング RL学会研究発表抄録集, 1, 76-80.
- 18) 下村明子 (2000) 看護学生の患者理解へのアプローチ―ロールレタリングを試みて― RL学会研究発表抄録集, 1, 139-149.
- 19) 下村明子 (2001a) 看護教育におけるRLを用いた看護理解のアプローチ (2) RL学会研究発表抄録集, 2, 93-103.
- 20) 原野義一 (2001) ロールレタリングにおける告白機能と守秘機能の統合 RL研究, 1, 15-26.
- 21) 下村明子 (2001b) 看護教育におけるロールレタリングを用いた実践―自尊感情の低い学生に対する患者理解のアプローチ― RL研究, 1, 49-57.
- 22) 目黒信子 (2006) ロール・レタリングの福祉領域への導入―高齢者支援者の気づき― RL学会研究発表抄録集, 7, 12-17.
- 23) 岡本茂樹 (2006a) 教育分析の方法としてのロールレタリング―カウンセラーを目指す学生の自己意識の変化― RL学会研究発表抄録集, 7, 31-34.
- 24) 岡本茂樹・倉田千代 (2006) ロールレタリングを用いた精神保健福祉士としての自己理解―精神障害者が書いた手記による教育分析― RL学会研究発表抄録集, 7, 35-38.
- 25) 尾口昌康 (2010) 認知症高齢者を介護する家族へのロールレタリング導入の試み RL研究, 10, 39-47.
- 26) 三星喬史 (2006) 教師の自己肯定感を高める

- ロールレタリングの一試論 RL研究, 6, 63-72
- 27) 關戸啓子 (2003a) 看護における「ロールレタリング」の活用に関する考察—「ロールレタリング」の発展過程を通して— 川崎医療福祉学会誌, 13 (2), 375-378.
- 28) 岡本茂樹 (2006b) ロールレタリングを用いた対人不安に悩む女子学生への支援—本音の吐き出しによる自己の受容— 交流分析研究, 31 (1), 50-61.
- 29) 岡本茂樹 (2007) 対人関係に悩む女子学生に対するロールレタリングによる支援—「解離的」症状を訴えるクライアントへの精神療法的アプローチの試み— 九州ルーテル学院大学発達心理臨床センター紀要, 6, 25-34.
- 30) 岡本茂樹 (2006c) 自己分析の方法としてのロールレタリング—カウンセラーを目指す学生の自己意識の変化— 交流分析研究, 31 (2), 103-112.
- 31) 小林 剛 (2000) 虐待連鎖の不安に怯える母親への心理的支援 RL 学会研究発表抄録集, 1, 61-75.
- 32) 岡本茂樹 (2002) ロールレタリングを導入した書簡によるカウンセリングの試み—虐待を繰り返す母親の心の傷を癒すために— RL 研究, 2, 47-60.
- 33) 飯田良子 (2001) 子育て支援におけるロールレタリング—胎児と両親との往復書簡— RL 学会研究発表抄録集, 2, 24-32.
- 34) 橋本富子 (2006) ロールレタリングを導入した悩める母親の支援 RL 学会研究発表抄録集, 7, 47-53.
- 35) 松島久美子・水野由香・星子美鈴・清田裕子・清田宗利・坂梨京子 (2010) 役割交換書簡法 (ロールレタリング: RL) の EPDS および親育て支援への効果 母子衛生, 51 (3), 264.
- 36) 原野義一 (2004) 多彩な不適応行動を示した児童の母親面接—補助手段としてのロールレタリングが効果を示した事例— RL 学会研究発表抄録集, 5, 27-34.
- 37) 目黒信子 (2006) 学校臨床におけるロールレタリング技法の活用—学校で心身に問題をもつ子どものロールレタリング— RL 学会研究発表抄録集, 7, 55-56.
- 38) 阿部 昇 (2002) ナラティブ・モデルからみたロールレタリング RL 研究, 2, 9-22.
- 39) 安田 潔・藤掛 明 (1987) 役割交換書簡法の基礎的研究 犯罪心理学研究, 24, 38-41.
- 40) 宇津野常人 (1998) 学校教育におけるロールレタリングの実践 交流分析研究, 23 (2), 131-137.
- 41) 春口徳雄 (1985) ロールレタリング—自己洞察の一つの技法として— 矯正教育研究, 30, 44-50.
- 42) 平 英一・荒内 眞・諏訪 仁・原田善英・相沢佳弘・佐藤晴良 (1991) 短期処遇施設における役割交換書簡法の導入とその結果について 矯正教育研究, 36, 155-159.
- 43) 竹下三隆 (1998) ロール・レタリングの効果的な活用について RL 研究会, 7, 30-33.
- 44) 河田将一・面高有作 (2007) 高機能自閉症青年に対するセルフカウンセリングの方法としてのロールレタリング RL 学会研究発表抄録集, 8, 10-13.
- 45) 春口徳雄 (1988a) 過呼吸症状の A 少年と境界例人格障害の B 少年に対するロール・レタリング (R.L) の事例考察 交流分析研究, 13 (1・2), 27-33.
- 46) 春口徳雄 (2007) ロールレタリングの効果について 前掲3), 5-29.
- 47) 成田善弘 (1989) 青年期境界例 金剛出版
- 48) 林 直樹 (2002) 人格障害の臨床評価と治療 金剛出版
- 49) 高木春仁 (2003) 生と死の自己対決—死に至らしめた被害者とのロールレタリングを通して— RL 学会研究発表抄録集, 4, 15-20.
- 50) 織田信男 (2010) カウンセリングにおける日記筆記の感情に及ぼす効果 心理臨床学研究, 28 (3), 257-267.
- 51) 春口徳雄 (1988b) ロール・レタリング (役割交換書簡法) による自己理解について—非行少年の臨床事例から— 犯罪と非行, 76, 28-51.
- 52) 三星喬史 (2007) 小学校2年生へのロールレタリングの試み RL 学会研究発表抄録集, 8,

22-25.

53) 内田伸子 (2008) 文章算出過程でのメタ認知の働き—物語の産出過程での「内なる他者の目」の発達—丸野俊一 (編) 【内なる目】としてのメタ認知 現代のエスプリ, 497, 78-87.

54) 二井 明 (1991) 小学校児童の文章表現の発達 全国大学国語教育学会発表要旨集, 81, 7.

55) 村井真理子 (1999) 文章表現指導の基礎的研究—「文章観」をどうとらえるか— 全国大学国語教育学会発表要旨集, 97, 26-27.

56) 井頭久子 (2007) 高齢者支援におけるロールレタリング RL 学会研究発表抄録集, 8, 30-36.

57) 宇津野常人 (2010) 高齢者の健康とロールレタリングの果たすことのできる役割 RL 学会研究発表抄録集, 11, 27-30.

58) 滑川生之・小林玲子・磯野みゆき (1992) ロールレタリングにおける保護調整の試み 矯正教育研究, 37, 74-77.

59) 和田英隆 (1994) 役割書簡法における課題役割の設定について RL 研究会, 3, 9-10.

60) 竹下三隆・榊原康伸 (1993) 役割交換書簡法の集団指導への応用と実践 矯正教育研究, 38, 74-77.

61) 春口徳雄 (1984) ロール・レタリング—自己洞察の一つの技法として— 交流分析研究, 9 (1・2), 59-65.

62) 小林 剛 (2007) ロールレタリング研究—その広がりと深まり— RL 研究, 7, 1-20.

63) 竹下三隆 (2001a) 少年院におけるロールレタリングの実践的技法の考察 RL 研究, 1, 39-48.

64) 岡本茂樹 (2009a) 受刑者に対するロールレタリングを用いた面接過程 犯罪心理学研究, 46, 56-57.

65) 和田英隆 (2008) ロールレタリング (役割交換書簡法) の原点について RL 研究, 8, 1-11.

66) 和田英隆 (1987) 役割書簡法—知で裁かれた少年の事例— 矯正教育研究, 32, 142-145.

67) 岡本茂樹 (2010a) 心理面接におけるロールレタリングの実際 RL 学会研究発表抄録集, 11, 1-4.

68) 野村俊秋 (1998) いじめを防止する指導 RL

研究会, 7, 10-14.

69) 岡本茂樹 (2008a) 「投影の応用」としてのロールレタリング 九州ルーテル学院大学発達心理臨床センター紀要, 7, 5-12.

70) 原野義一 (2007a) 両極性技法と補助自我技法を用いたロールレタリング—不登校生徒に適用した事例— RL 学会研究発表抄録集, 8, 57-59.

71) 高木春仁 (1998) 被害者や敵対していた家族との対決と受容そして自己洞察 RL 研究会, 7, 25-29.

72) 平尾浩子 (2005) 精神科外来におけるロール・レタリング (役割交換書簡法) 導入の試み 日本心理臨床学会発表論文集, 24, 83.

73) 岡本茂樹 (2010b) 受刑者に対するロールレタリングを活用した教育プログラムの効果の研究 RL 学会研究発表抄録集, 11, 15-18.

74) 宇津野常人 (2001) 課題に準じて実施したロールレタリングの成果について RL 学会研究発表抄録集, 2, 53-61.

75) 目黒信子 (2003) 学校臨床におけるロールレタリング導入に関する研究—気づきを深める書簡相手の決定をめぐる— RL 研究, 3, 9-22.

76) 岡本茂樹 (2008b) 父親に対して否定的感情をもつ女子学生へのロールレタリングによる支援心理臨床学研究, 25 (6), 647-658.

77) 波多江貴美子 (1995) ロール・レタリングの実践 前掲 10), 131-148.

78) 金子周平 (2011) 受容的な人物とのロールレタリングを用いた大学生の予防的援助の—事例 RL 研究, 11, 17-28.

79) 高木春仁 (2004a) 処遇技法を学ぶ ロールレタリング② 刑政, 115 (6), 56-67.

80) 岡本茂樹 (2005) アイデンティティの危機にある男子学生のロールレタリングによる自己意識の変化 RL 研究, 5, 21-31.

81) 高木春仁 (1999a) 相当長期の処遇勧告が付された少年の事例 矯正教育研究, 44, 33-39.

82) Yoshikazu Harano (2005a) Role Lettering Therapy : A New Transactional Analysis Technique from Japan. *Transactional Analysis Journal*, 35(3), 254-259.

- 83) 梅崎照行 (1990) 役割交換法 (ロール・レタリング) 矯正教育研究, 35, 143-146.
- 84) 高木春仁 (2010) 矯正教育におけるロールレタリングの取り組みについて RL 学会研究発表抄録集, 11, 45-48.
- 85) 岩本幹世・村上正人・桂 戴作・葛西浩史 (1988) 交流分析, ロールレタリング並びにチェアテクニックを中心とした治療により軽快状態の続いている食行動異常の一症例 交流分析研究, 13 (1), 35-38.
- 86) 春日徳雄 (1989) 役割面接 (R・I) とロール・レタリング (R・L) 交流分析研究, 14 (1・2), 37-42.
- 87) 岡本茂樹 (2009b) エンプティチェアテクニックを用いた受刑者への心理面接 九州ルーテル学院大学心理臨床センター紀要, 8, 1-8.
- 88) 鈴木恵美子・降矢英成・荒井康晴・村山ヤスヨ・野木洋子・原 節子・桂 戴作 (1991) 自律訓練法とロールレタリングの併用により軽快をみた過喚起症候群の 1 症例 心身医療, 3 (3), 406-409.
- 89) 岡本泰弘 (2006) 生徒のメンタルヘルスサービスを促進する予防・開発的教育相談活動に関する研究 RL 学会研究発表会, 7, 43-46.
- 90) 竹下三隆 (1999) 「自分ノート」の手法について—ノートを活用した更生へのプログラム— RL 研究会, 8, 15-24.
- 91) 高木春仁 (2004b) 処遇技法を学ぶ ロールレタリング① 刑政, 115 (5), 106-113.
- 92) 岡田幸治 (1998) G1 少年におけるロールレタリングの活用とその処遇効果の検証について 矯正教育研究, 43, 21-27.
- 93) 目黒信子 (2001) RL, 心理臨床的視点からの気づきと課題—セラピストによる RL の自己実践から— RL 学会研究発表抄録集, 2, 15-21.
- 94) 岡本茂樹 (2008c) 交流分析からみた矯正教育—ロールレタリングの事例から— 交流分析研究, 33 (2), 88-95.
- 95) 目黒信子 (2005) 学校臨床におけるロールレタリング技法の活用 RL 学会研究発表抄録集, 6, 60-61.
- 96) 高木春仁 (1999b) 被害者との対立により, しょくよく罪意識を深めた事例 RL 研究会, 8, 27-34.
- 97) 中村和人・和田英隆 (1994) 役割書簡法—少年の問題点と課題役割の設定— 矯正教育研究, 39, 67-69.
- 98) 金子周平 (2009) 臨床心理面接へのロールレタリングの導入における諸問題とプロセス理解 RL 研究, 9, 1-12.
- 99) 塚田厚弥 (2002) 登校拒否傾向のある児童と自己主張の強い児童との対比的研究—ロール・レタリングによるアプローチ— RL 学会研究発表抄録集, 3, 87-96.
- 100) 岡本茂樹 (1999) ロールレタリングによる本音の吐き出し RL 研究会, 8, 120-126.
- 101) 杉田峰康 (2003) 交流分析の理論と実際—ロールレタリングのための基礎知識— RL 研究, 3, 1-8.
- 102) 長岡安子 (1994) 主体的に生きる生徒の育成 RL 研究会, 3, 19-20.
- 103) 平 英一 (1993) 非行少年に対する役割書簡法と内省の深化 RL 研究会, 2, 4-5.
- 104) 新田 茂 (1994) 心理書簡法による気づき 犯罪心理学研究, 32, 86-87.
- 105) 宇津野常人 (2004) 中学校におけるロールレタリングの実践報告 RL 学会研究発表抄録集, 5, 49-52.
- 106) 小澤 真・鈴木由佳 (2006) 大学生の進路選択の悩みに対するロール・レタリングの効果 聖徳大学心理教育相談所紀要, 4, 37-43.
- 107) 徳丸幸夫 (2008) キャリア教育の視点に立った夢や希望をはぐくむ道徳の時間の指導の工夫 RL 学会研究発表抄録集, 9, 27-34.
- 108) 關戸啓子 (2003b) ロールレタリングの効果に関する一考察 (2)—看護系大学 1 年次学生に実施して— RL 学会研究発表抄録集, 4, 73-76.
- 109) 井頭久子 (2008) 自我の統合に向かうライフヒストリーの研究—高齢者へのロールレタリング実践を通して— RL 研究, 8, 13-30.
- 110) 原野義一 (2005b) ロールレタリングの様々な適用方法について RL 学会研究発表抄録集, 6, 45-48.
- 111) 萩原敏弘 (1994) 非行のあった少年に対する

- ロール・レタリングの一事例 RL研究会, 3, 7-8.
- 112) 浅井与志夫 (1999) 心の教育とロール・レタリング RL研究会, 8, 91-99.
- 113) 是木 誠・野田圭史 (1998) 両親を憎む少年へのアプローチ RL研究会, 7, 43-46.
- 114) 高木春仁 (2000) しょく罪指導における「ロールレタリング」の活用—被害者との対決により被害者感情に気付かせる— RL学会研究発表抄録集, 1, 22-31.
- 115) 岡本茂樹 (1997) 摂食障害生徒へのロール・レタリング導入による臨時的援助とその考察 RL研究会, 6, 40-43.
- 116) 春口徳雄 (1994) ロールレタリング (役割交換書簡法) による受容と対決の事例考察 RL研究会, 3, 15-16.
- 117) 宮原浩文 (1999) ロール・レタリングの活用により罪障感を深めた事例について RL研究会, 8, 35-45.
- 118) 下門美重子 (1996) いじめとロール・レタリング RL研究会, 5, 18-20.
- 119) 浅井与志夫 (1996) いじめを抑止する力を高める指導 RL研究会, 5, 21-25.
- 120) 小林 剛 (2002) 「書くこと」による感情と思考の統合と自己洞察 RL研究, 2, 1-8.
- 121) 岡本茂樹 (1998) 学校教育へのロール・レタリングの効果的導入と実践 RL研究会, 7, 47-50.
- 122) 富士川俊子・岡本茂樹 (2007) 就職活動における自己分析の方法としてのロールレタリング RL学会研究発表抄録集, 8, 14-17.
- 123) 下村明子・松村三千子・内藤直子 (2008) ケアリングの実践に有効な体験学習方略としてのロールレタリング 日本看護学教育学会誌, 18 (2), 11-21.
- 124) 高木春仁 (2005) 矯正教育におけるロールレタリングの実施について RL学会研究発表抄録集, 6, 29-35.
- 125) 岡本茂樹 (2006d) ロールレタリングを用いた摂食障害の女子学生に対する卒業間際の支援 RL研究, 6, 13-25.
- 126) 内田智章 (1999) ロールレタリングのセルフモニターとしての効果—過去の自分との対話を通じて— RL研究会, 8, 46-55.
- 127) 下村明子 (2003) 看護教育におけるロールレタリング—ケアリングに通じる患者理解のアプローチ— RL研究, 3, 35-47.
- 128) 春口徳雄 (1995) ロールレタリングの理論 前掲10), 12-31.
- 129) 高山志帆 (1997) ロール・レタリング体験 RL研究会, 6, 44-46.
- 130) 原野義一 (2007b) ロールレタリングにおける対象選択について—インパス診断の適用— RL学会研究発表抄録集, 8, 30-36.
- 131) 杉田峰康 (2000) ゲシュタルト療法とロールレタリング RL学会研究発表抄録集, 1, 14-21.
- 132) 原野義一 (2009) 腹痛を伴った継続的不登校生徒に対する面接過程の一考察—交流分析とロールレタリングの視点から— 臨床教育学論集, 3, 1-12.
- 133) 梨木昭平 (2002) 国語家教育とロールレタリング RL学会研究発表抄録集, 3, 76-85.
- 134) 津田直子 (2004) ロールレタリングを導入した小学校の授業 RL学会研究発表抄録集, 5, 53-56.
- 135) 元木幸三 (2004) 作文指導におけるロールレタリングの活用について RL学会研究発表抄録集, 5, 77-79.
- 136) 小林 剛 (2004) 虐待連鎖の不安に怯える母親への心理的支援 (後編) —ロールレタリングによる支援を通して— RL学会研究発表抄録集, 5, 39-46.
- 137) 竹下三隆 (2001b) 自分から自分へのロールレタリング (自分の中の相反する二つの気持ちを表現させる) RL学会研究発表抄録集, 2, 38-43.
- 138) 岡本茂樹 (2003) ロールレタリング技法の指導実際1 RL学会研究発表抄録集, 4, 29-36.
- 139) 馬場明子 (1995) 女子非行少年の母子関係—ロールレタリングを通して— 犯罪心理学研究, 33, 78-79.
- 140) 藤原俊如 (2008) ロールレタリングに対する「抵抗」に関する考察 RL学会研究発表抄録集, 9, 14-15.
- 141) 長岡安子 (1993) ロール・レタリングによる

金子 周平・高木 春仁・松岡 洋一：
ロールレタリングの適用対象・方法論・効果検証に関する分析と課題

主体的に生きる生徒の育成 RL 研究会, 2, 21-26.
142) 溝口博昭 (1997) 中学生におけるロール・レ
タリング (手紙ノート) の実践と生徒の心理の一考
察 RL 研究会, 6, 20-28.
143) 元木幸三 (1999) ロールレタリングを活用し

た学級経営 RL 研究会, 8, 66-75.
144) American Psychological Association (2010)
Ethical Principles of Psychologists and Code of
Conduct (www.apa.org/ethics/code/index.aspx).